



Comptes amoureux研究(5) bis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006086

Comptes amoureux 研究 (5) bis

鍛 治 義 弘

先の拙論で¹、『恋の物語』と同時代に刊行されたエリゼンヌ・ド・クレンヌにおける「詩的文体」の問題を検討したが、その際、主に紙幅の関係で、いま一つの「詩的散文」の作品を論じることができなかった。今回の論文ではこのフランソワ・アベール François Habert の *Contemplation poétique*²『詩的瞑想』を扱うことにする。

Henri Franchet³や Henri Chamard、Chiara Lastraïoli⁴の記述を纏めれば、アベールの略歴は以下のようなだろう。生年は 1508 年頃と考えられ、ベリー地方のイスタン Issoudun (現在アンドル県) 出身で、パリで学業を始めた後トゥルーズで法律の勉強を続けたが、父が死亡したため、自ら身を立てねばならなくなり、高位聖職者の下で秘書を務め、細々と暮らす。しかし早くから詩の愛好家であり、宮廷への出入りを認められ、フランソワ一世、アンリ二世の宮廷で好評を博し、「王の詩人」の称号を手に入れる。1529 年以降 30 年ほどの間に 50 余りの作品を公刊するが、その中にフランソワ・ラブレーの『第三之書』の直接的な典拠ともみなされる『パンタグリユエルの夢』⁵も含まれている。1561 年以降新たに作品が上梓されておらず、この年に死亡したと考えられている。

『詩的瞑想』は *La contemplation Poétique du Banny de lyesse, natif Dyssouldum en Berry, ou sont contenues les amours infortunées de deux amans & la conclusions de l'auteur sur la mort d'iceulx au sens moral, le tout en Prose poétique cueillie au iardinet de rhetorique & poésie* なるタイトルで、*Le combat de Cupido et de la mort* を始め韻文作品も含む作品集の 2 番目に配置された散文作品であり、このタイトルでアベールははっきりと「詩的散文」からなると宣言している。ヌヴェール司教シャルル・ド・ブルボンへの献呈の書簡、ラテン語での読者へのエピグラムとそのフラン

¹ 拙論 「Comptes amoureux 研究 (5)」、『テキストの生理学』、朝日出版社、2008、pp.195-206。

² *Le combat de CVPIDO ET DE LA MORT, NOUVELLEMENT COMPOSE par le Banny de lyesse, Francoys habert natif D'yssouldum en Berry Avec plusieurs oeuvres contenues cy apres : Premièrement le Combat de Cupido & de la mort . Item la contemplation Poétique, contenant les l'amentables amours de deux amans. ... On les vend á Paris en la rue neufue notre Dame a l'escu de France. Par Alain lotrian.* 刊行年は印刷されていないが、採録された特認の日付は 1541 年 1 月 4 日である (おそらく旧方式、現行年では 1542 年)。以下本論でのこの書への言及、引用は、フランス国立図書館蔵の版 (B.N. Rés. Ye 1684) により、折丁記号で示す。また原文の綴り、句読法をほぼ踏襲するが、(1) 略字記号は現行綴りにして文字化し、(2) 長い s は短い s に変更し、(3) アクセント記号の位置は現用の位置に変更する。

³ Henri Franchet, *Le philosophe Parfait et le Temple de Vertu de François Habert*, 1922 (Slatkine Reprints, 1976)

⁴ *Dictionnaire des lettres françaises, Le XVIe siècle*, Fayard et Librairie Générale Française, 2001 の François Habert の項目。

⁵ *Le Songe de Pantagruel avec la deploration de feu messire Anthoine du Bourg, chevalier de France. Avec Privilege. Imprime a Paris, par Adam Saulnier.* (B.N. Rés. Ye 1688 ; Musée Condée, 885)

ス語訳を含めて 70 頁の小品で、梗概を記せば以下ようになる。

作者 *auteur* は詩作に疲れて野に出ると、春の緑に包まれた鳥の囀る泉に導かれ、泉の周囲に描かれたユピテルとアラクネを始めとする恋の物語を眺める。そこに若者と乙女がやって来たので、物陰に隠れて二人の様子を窺う。若者は乙女に恋を打ち明けかき口説くが、乙女は学芸をも習得しており若者の恋の喜びへの巧みな誘いを退ける。拒まれた若者はそこから姿を消し、クピードーの神殿に赴き、クピードーに乙女が恋の力を知るようにと祈願する。自らの力を示そうと恋の神は乙女の心臓を矢で刺し貫く。乙女は恋の傷を負い、若者が見えなくなり、若者が姿を現すと心を許し、二人は思いを遂げる場所へと向かおうとする。そのとき蛇が現れ、乙女の裸足の足を噛み、乙女は息絶える。乙女を失った若者も刃を胸に突き刺し自ら命を絶つ。そこに通りかかった噂の神ファーマがこの死の知らせをムーサイたちとポイボスに齎す。メルクリウスはこの死に憤り、死神を罵るが、死神もこれに反論する。ムーサイたちは若者と乙女の墓を作り、メルクリウスが冥府からプラクシテレスとアペレースを呼び出し、ムーサイたちの墓碑銘を刻ませ、描かせる。クレイオーを始めとするムーサイたちは自らの墓碑銘を読み上げ、続いて森の女神たちとパンも墓碑銘を読む。メルクリウスは立ち去り、ムーサイたちも、友を亡くして悲しみ地上を去るパンとともに星界へ戻る。最後に作者による結論が付され、ウェヌスの愛を非難し、乙女が蛇に噛まれ死ぬことについて、蛇は罪と、罪のもと、誘惑者を表すと解釈して、次のようにイエス・キリストの愛と結婚を勧めて終わる⁶。

il reste d'expliquer ceste amour chaste & ordonnée, selon laquelle nous debuons viure en ceste terestre habitude. C' est l' amour en IESVCHRIST, suyuant les limites de laquelle nous est permis (pour euter fornication) de la conionction de mariage nous lyer, en espoir de future procreation, & en alienant de noz cueurs toutes aultres concupiscences, & illicites adulteres, lesquels si par les loix & constitutions ciuiles souloient estre pugniz, á plus forte raison, veut & commande le plus grand moderateur du firmament que de noz cueurs ilz soient totalement extirpéz, & interdictz, & que l' homme a la femme, la femme a l'homme, conserue pudique affection, oultre ceste amour coniugalle.(f. H v^o)

さて、墓碑銘や罵りなどの韻文もかなりの部分を占めるこの「詩的散文」の物語は以下のよう

VNg iour apres longue fatigation d'entendement obnubile de la continuelle assuefaction aux muses, voulant icelluy par intermission solacier, deliberant de commigrer en quelque beau, & illustre lieu rural, pour a mes ennuyz & vie contristée & melencolique donner prompt allegement, i'estimay que ceste ruralle commigration estoit á mes espritz vtile & salutare, preuoyant que la belle Flora de blancheur eminente sur la neige auoit deuestus tous arbrisseaulx de leur hyemal & automnal habit, pour iceulx

⁶ 『詩的瞑想』での恋愛観、結婚との関係、クピードーにより恋に落ちる点などは、『恋の物語』との関連で興味深い問題を提出するが、文体を扱う本論では触れない。

decorer, & reuestir de leur robbe liliale, dont mise soubz les piedz m'a trsitiesse, lame de laquelle se transporta au fleuve de Lhethé pour se munir d'obliance, ie paruiens apres longue itineration en vne florissante & nayue prairie circonuoysine d'ung odoriferant & souef verdbocage, ou desia par preuention de son deulx amy Titan la belle Aurora sa clere & irradiante lumiere auoit esbandue, les buyssonnetz par la vigueur de la blanche Flora estoient noblement reuestus de leur solacieulx vestement, decore de couleur cristalline, les petis oyseletz sur les branches argentines, & rameaulx de couleur liliale de leur armonieulx gosier decouppoient la siluestre musique, par mesure si disposée que mes espritz me sembloient du tout estre transportéz, & ravis entre les turbes angeliques. (f. D ij v^o - D iij v^o)

この文に René Sturel が注目したのも当然であろう⁷。この若くして第一次世界大戦に斃れた学者は、学者語で一般にラテン語を引き写した稀な用語の探究、形容詞と副詞の二重表現、ラテン語のように被限定辞を限定辞の後に、動詞を被制辞の後に送る傾向を持つ通常ではない語順の存在を指摘し、「詩的散文」の研究を切り開いた。実際この文には、以上の指摘以外にも、フローラやアウロラを利用した時の迂回表現、レーテー川の神話への言及、花咲く野の芳しい木陰で小鳥の囀る悦楽境のトポスが用いられ、幾つもの関係詞、接続詞、前置詞句に加えて、同格に用いられた現在分詞や絶対用法の過去分詞により、極度に長い文になり、また音の面でも、t(s)ion, ment, ant の語末音反復が認められ、レトリックの多くの技法を用いた、大いに装飾的な文を現出させている。ただ<armonieulx>,<musique>,<mesure>の語で喚起される諧調をこの文自体で実現しているかは確かではない。また作者が天使の軍団の如き小鳥たちの間で熱狂し夢中になっている (transportéz, & ravis) ように思われたことも記憶しておきたい。

詩的文体のその後の研究の展開の概要は、前掲拙論に譲るとして、本論では、この冒頭の調子が『詩的瞑想』全体のものであるのかを、前掲拙論同様に統辞面、語彙面、レトリックの文彩、そしてネオ・プラトニズムとの関連から検討して、詩的文体の特徴を明らかにするよう試みよう。

まずは統辞から始めることとし、語順の問題を検討しよう。Sturel は、冒頭の文での、通常ならざる語順として、被限定辞と動詞の後置の傾向を指摘したが、ここで私たちはむしろ前置と分離を取り上げる。前置とは近代フランス語では文の流れで後に置かれるべき要素が前に置かれている場合で、このテキストでは、直接目的語名詞+動詞、名詞限定補語+名詞、限定補語+形容詞などの語順が頻繁に見られる。直接目的語名詞+動詞の語順は、<Mais son cueur en aulcune maniere on ne peult esmouvoir>(E iij r^o) (強調は論者。以下同様) のような場合で、動詞は直説法現在、複合過去、単純過去、不定詞で、この作品の散文の部分に 16 例存在する。名詞限定補語+名詞としては、<ie te fais professeur, & des interieures affections, ensemble de ma liberte entre tes mains deliurance,> (E viij r^o) を例として挙げうるが、多くは限定される名詞の直前に限定

⁷ René Sturel, <La prose poétique au XVI^e siècle>, in *Mélanges offerts par ses amis et ses élèves à M. Gustave Lanson*, Hachette, 1922, pp.47-60

句が置かれ、総計 16 階見られる。<voyant que de proferer verite m'a langue est coustumiere.> (D vij v°)のような限定補語＋形容詞の語順は 8 回数えられる。

分離と私たちが言うのは、複合時制、受動態を構成する助動詞と過去分詞の組み合わせや、いわゆる法の助動詞と後続する不定詞の連鎖において、二つの要素の間に、近代フランス語では通常見られない要素が入れられている場合である。助動詞 avoir, être と過去分詞の分離としては、<Dont il se vente auoir les cueurs humaines lyez & captifs> (E j v°)と<Le lieu soit du regard humain separé> (E viij r°)を例として挙げるが、挿入される要素は、主語代名詞（それだけであれば単なる動詞―主語の倒置であるが、同時に直接目的語名詞も挿入されている）、直接目的語名詞もあるが、状況補語が大部分を占め、総計 16 例指摘できる。法の助動詞と不定詞の結びつきでの分離は、<les autres Dieux de luy inferieurs n'ont peu a tes trectz aguisez faire resistance,> (E iiij r°)のような場合で、法の助動詞は pouvoir と vouloir で、5 例存在する。なお以上の二つの場合については過去分詞＋être となる場合も<vne Fontaine ..., couuerte estoit, & circuite d'arbrisseaulx verdoyans,> (D iij v°)の一例のみ存在し、不定詞＋法の助動詞の語順も<faire se pourroit>の表現が 2 回(E vij v°, F vij v°)出現している。これらの語順は韻文の部分では、<Laisséz en ont Oreades rochers,> (G iiij v°), <Tous deux rauis sont par temerité> (G iij r°), <leur nature estre debuoit regie> (F iiij v°), <Le temoigner vous peult suffisamment> (G iij v°)とより多様な形に見られるものの、Maria Colombo Timelli が当時のイタリア語では認められていたが、フランス語では維持するのが困難であると指摘した語順であり⁸、『詩的瞑想』では、殊に散文部分では、ごく珍しい例だと言えるだろう。

こうした通常ならざる語順とともに、私たちの目を引くのは、絶対分詞節といわゆる不定詞節の使用である。絶対分詞節は周知のごとく分詞が主文の主語とは異なる独自の主語を持ち、副詞節の役割を果たしている場合であり、当該テキストでは、現在分詞の場合は<Quoy voyant l'arrogante chymere, & que sa puissance ne pouuoit estre nuysible á l'endroit dudict Mercure,> (F vj r°)の一例のみであり、<entierement ce lieu consideré, les conduictz d'icelluy amplement visitéz, la fontaine tant illustre de toutes pars contemplée,> (D vj r°)のような過去分詞の場合が多く、29 例認められる。この頻度は接続詞を用いる場合よりも素早く行為を描写するのに適していることから来るものであろう。

Gougenheim が不定詞節と言うのは、動詞が目的語の後に不定詞を伴う構文で、近代フランスでは、知覚動詞の一部と使役構文に限られているものが、16 世紀にはより広範に認められていたのである。例えば、現在では一般にはこの構文を用いないと辞書に注記されている apercevoir も<i'appercoye le reclament amoureux, & noble iouuenceau á qui lherbe verdoyante seruoit de siege, a lentour d'icelle excellente fontaine, rendre son amye attentue de l'harengue qui s'ensuyt.> (D iiij v° - D v r°)のような例が見られ、その他 lire, persuader, permettre のような動詞、あるいは avoir opinion の動詞句にもこの構文が使用され、知覚動詞、使役構文を除いて、『詩的瞑想』に計 11 例を見

⁸ Maria Colombo Timelli, <La première édition de l'*Histoire d'Aurelio et d'Isabel* (Gilles Corrozet, Paris, 1546) – ou : Quelques problèmes de traduction d'italien en français au XVI^e siècle>, in *Traduction et adaptation en France à la fin du Moyen Age et à la Renaissance*, Honoré Champion, 1997, pp.309-310.

出すことができる。この構文を Gougenheim はラテン語の模倣によると考えており⁹、先の絶対分詞節もラテン語の絶対的奪格に相当するのであるから、これら二つの構文をラテン語法とみなすことも、それほど誤ってはいないだろう。

さて、通常ならざる語順の頻出と、ラテン語法の構文の頻繁な使用¹⁰は、何よりも『詩的瞑想』の散文に自由な語順を与える。上記の語順に加えて、状況補語句や間接目的補語句も、通常の語順ではないとは言えないが、文中でさまざまな位置に置かれて、語順の自由度をさらに高めている。また上記の例で理解されるように一つの要因だけではなく幾つかの要因が複合して使用され、一読しただけでは文意を捕えがたいほど晦冥な文を作り出していると言えるだろう。

次に語彙を検討してみよう。ルネサンスのエクリチュールの大きな特徴の一つである二項表現 *binôme*、多項表現 *polynôme* は先に引いた冒頭文にも頻繁に用いられており、作品全体にも頻出するが、使用に関して特別な配慮があるとも見えないので、ここでは使用頻度の多さを指摘するに留める。

Sturel も指摘していた新語については、冒頭の文だけでも *fatigation*, *obnubile*, *assufaction*, *commigrer*, *commigration*, *arbrisseaux*, *hyemal*, *itinerarion* などの語が少なくとも 16 世紀に現れた語と思われ、各語には古典ラテン語、あるいは民衆ラテン語の *fatigatio*, *obnubilus*, *assuefactio*, *commigro*, *commigratio*, *arboriscellus* (手持ちの『新ロベール小辞典』1993 年版では 17 世紀初出となっている), *hiemalis* が対応し、最後の *itinerarion* は主要な辞書には見いだせないが、ラテン語 *itinerari* からの造語と考えられるので、Sturel のラテン語を引き写した稀な語の探究との指摘はまさに正鵠を射ている。今あげた『新ロベール小辞典』の場合のように語の初出の決定にはまだまだ困難な点も多いが、『詩的瞑想』全体に渡ってラテン語由来の新語の使用は認められ、32 語ほどが確認される。中では *ingenerer* (D vj v°) や *mercature* (F vj v°) のような主要な辞書に掲載されていない語も含まれ、それぞれラテン語 *ingenerare*, *mercatura* に相当すると思われる。また Bloch /Wartburg の『フランス語語源辞典』は *expectatiue* (E vij r°) を 1552 年初出、*halluccinéz* (G viij r°) を 1611 年初出、『新ロベール小辞典』は *plutonique* (F viij r°) を 1550 年初出としていることを付言しておこう。

語彙面で私たちが指摘したい最後の点は、言い換えの多用である。現代フランスにも見える特徴でもあり、ルネサンス期に盛んに用いられた技法である増幅の一側面とも考えられるが、『詩的瞑想』では作品の意図と大きく関係していると思われるのである。梗概でも記したが、作者は作品末に自ら解釈を付し、狂おしい愛 *folle amour* (G ij r°)、ウェヌスの愛 *amour venerique* (D vj v°) を非難し、貞潔な愛 *chaste amour* (G iij r°)、ウェヌスの愛とは別々の愛 *une autre amour que celle de Venus* (E ij v°)、キリスト的愛と結婚を称揚していた。またクピードーの矢に傷つけられる以前の乙女も無軌道な情欲 *desordonnée concupiscence* (E j r°) を非難する。そしてこの性愛、性の

⁹ Georges Gougenheim, *Grammaire de la langue française du 16^e siècle*, Picard, 1974, p.171.

¹⁰ こうした用例の頻度は、同じ作品集の散文作品 *Combat de Cupido et de la mort* と比べて、正確な回数は挙げないが、明らかにずっと多い。

快楽が、delit, plaisir, jouyssance, appetit, vouloir, soulas, plaisance, requeste, amour, liesse などの名詞と Cupidinique, impudique, lubrique, abhominable, desordonné, irraisonnable, folles, illicites, charnel, libidineuse, pernicieux などの形容詞を組み合されて様々に変奏されるのである。貞潔な愛の表現が7つほどに収まるのに比しての多様さ故に、前者の愛を却って目立たせるのではないかと推量したくなるほどであるが、形容語の意味が示すように、作者の意図はあくまでも性愛、性の快楽を非難することであり、その表現の多様性は強調の役割を果たしているのである。誠に「喜びを追われた者」Banny de lyesse にふさわしい立場と言うべきか。

その他の文彩については具体的な例文に基づいて検討することにしよう。
まずはレトリックの教えを受けた乙女¹¹が語る部分を見てみよう。

Assez te peult esmouuoir l' infidelité de Paris Alexandre qui contemnans de la nymphe Oenone, le pudique mariage, rait l' impudique Helaine, dont le noble & antique Illion, fut par flammes miserablement consommé, & le sang des deux excercites cruellement respandu, mais qui fut l' origine d' une si grand calamite, fors la desordonnée concupiscence, & lubrique consentement de Paris & Heleine : (f. E j r^o)

この一節では言い寄る若者から自らの立場を弁護するために、パリス・アレクサンドルの例が引かれる。恐らくルメール・ド・ベルジュの先例に倣い、この古代トロイアの英雄のオイノネーに対する愛と強奪した (rauit) ヘレネーに対する恋が対比され、派生関係にある語末音反復<<le pudique mariage>>と<<impudique Heleine>>の表現で際立たせる。またパリスとヘレネーに用いられた miserablement, cruellement, consentement, infidelite, calamite の語末音反復は、同一音によりこれらの語が呼び起こす観念を結び付け、語り手乙女の両者に対する評価を強調していると言えよう。さらに現実のトロイアを灰燼に帰せしめた炎 flamme は、伝統的に、またこの作品でも一貫して恋の比喩的表現として使用されており、ここではパリスの身を滅ぼすことになる恋の焰をいわば隠喩的に喚起する。

次に乙女に拒絶された若者がクピードーに訴えかける演説を見てみよう。

Je ne suis ignorant (O gracieux enfant dieu d' amours Cupido) du tres grand & hault pouuoir, par lequel non seulement les hommes mortelz tu puis espouuenter, mais aussi aux dieux immortelz tu fais sentir t' a sagette toxiquée & venimeuse, dont ilz se rendent prins & captifz soubz ton arc doré, inflammatif du vif brandon Venerien. Et ie qui Dieu ne suis pas ains vng fragile & tendre iouuenceau, ore ne me doibs esbayr si ie suis contrainct à ta force diuine totalement me rendre captif & obeissant à ton vouloir me soubzmectre cognoissant que celle (pour qui mon cueur est penetre) est de telle formosité pourueu que par la contemplation d' icelle, ie suis transporte & raui que le manger m' est

¹¹ Je pourroye facilement succumber aux argumens par toy mis en euidence, si la mesme rethorique dont tu vses, ne m' estoit propre & commune, & des m' à ieunesse ie n' estoye instruite en icelle, i' ay (dieu mercy) le langage en main, pour defendre mon honneur, & euader les subtilitez & astuces, dont ton harengue est fulcié. (f. D viij v^o)

amertume, le boire fascheux & difficile, & de dormir entierement prohibe, & deffendu, si que ie ne scay moyen dont ie puisse longuement respirer, si ta grace en ce mien martire n' est estendue. (E iij v°)

この一節でも冒頭のクピードーに対する呼びかけの後、死すべき人間 hommes mortelz の一人である私と不死の神々 dieux immortelz が同じように恋に捉えられることが、派生関係にある語末音反復も利用して、対比的に描かれる。

les hommes mortelz tu puis espouuenter における直接目的補語名詞の動詞に対する前置、à ta force diuine totalement me rendre captif & obeissant (現代語なら je suis contraint à me rendre captif et obeissance à ta force divine totalement, me soumettre à ton vouloir, connaissant que ...となるであろう)、de dormir entierement prohibe, & deffendu における限定補語の形容詞に対する前置によって、非常に自由な語順が達成されている。また grand & hault pouuoir などの二項表現も頻出し、totalement, entierement, longuement の語末音反復は若者の恋の苦しみを意味的にも、音の上でも強調している。

ここで若者は乙女の美しさを眺めて、飲食が苦痛になり、眠ることができないほど、熱狂し夢中になっている (transporte & rauy) ことにも注目しておこう。

以上見たように、『詩的瞑想』には対比、古典への言及などの文彩がふんだんに用いられているが、乙女がレトリックを学んだと言っていることや、若者がなす演説という形式が、こうした文飾を動機づけてもいる。また同音反復は特に意味の強調に利用されている。

最後に Jean Lecointe の指摘するネオ・プラトニズムとの関連を見ておこう。

次のメルクリウスの罵りに対する死神の返答には明らかにプラトンの思想を窺うことができる。

Le corps mortel est chose transitoire,
Mais au diuin & noble consistoire
(Le corps laisse) le noble esprit aspire
Voilà en quoy consiste mon empire,
Tuant les corps par le commandement
Du dieu qui à crée le firmament,
Adonc l' esprit (quant deliure il est)
Du mortel corps au ciel faict son arrest,
Le corps n' est donc qu' une obscure prison
Ou est l' esprit qui est plain de raison,
Que plusieurs foyz il ne peult vsurper,
Sans de labeurs beaucoup participer,
Et n' en á point plaine fruition
Sans moy qui fait la separation
De l' humain crops, & l' esprit raisonnable
Qui tend au ciel en soulas pardurable,

(f. F vij r^o-v^o)

肉体と魂の二元性、魂の牢獄としての肉体（肉体は精神がある暗い牢獄に過ぎない）との思想は明瞭にプラトンの教説と最も合致しやすい部分であるからなのかも知れない。しかし愛の階梯や愛のデーミウルゴスとしての万物を生み出すような力への言及はなく、貞潔な愛と狂おしい愛、キリスト教の愛とウェヌスの愛を対比させ、前者を称揚し後者を非難するに留まる。

寓話の利用についても明らかで、古典的神話の枠組を用いており、虚構性はクピードの神殿のシーンから高まり、若者と乙女の死後は完全に虚構の世界へ移行し、結論で作者が寓意を解釈しているのは、梗概で述べたとおりである。

Fureur (furor) 熱狂、恍惚の問題はどうであろうか。これまでの引用でも transporter, ravir という動詞が、具体的意味と比喩的意味で使われていることを指摘してきたが、引用以外の個所でも同様に多数使われている。冒頭のシーンの引用の末尾で、作者は小鳥の囀りに熱狂し、あたかもそれが伝染したかのように、若者も乙女の美しさに心を奪われ夢中になる。このように熱狂は登場人物には十分表現されており、それを反映したかのように文章は自由な語順で展開していたのだが、アペールは献呈の書簡で自ら作品の制作を <Rhetorique & Poésie, dont la certaine experience a fait ma Plume estendre son vol pour s'employer a la confection de loeuure présent > (C vij r^o-v^o) と表現していたのであった。翼（ペン）の飛翔のイメージを用いて自らの書く行為を表したこの個所こそ、レトリックと詩学の経験により、熱狂の内に自由に展開していく『詩的瞑想』の文体を最も雄弁に語っている。

以上の検討を通して、『詩的瞑想』の「詩的散文」とは、通常ではない語順やラテン語的構文を多用した自由な語順を備え、ラテン語的珍しい語を用い、また言い換えの変奏により作品の意図を強調し、同音の反復を含むレトリックの技法で飾られた、ネオ・ネオプラトニズムの散文で、Jean Lecointe の言う「靈感を受けたアジア趣味」¹² に、非常に近いものだと考えられる。ただし同音反復を利用して対比の意味を強調することはあっても、そしてムーサイたちの音楽にしきりに言及しているが、諧調への配慮はほぼ見られず、文自体が音楽性を体現しているとは到底言えない。また自由な語順での文意の曖昧化、複雑化は、靈感を受けた詩人の俗人の理解を妨げるための晦冥さとも解されようが、非常に不規則な書法、殊にアポストロフィ記号の不自然さ (m'a=ma, c'este=ceste, l'auoit=lauoit<lauer など) も、当時の不規則な慣習によるだけでなく、韜晦の意図を持つのかも知れない。

(2008.11.28)

¹² Jean Lecointe, *L'idéal et la différence, La perception de la personnalité à la Renaissance*, Droz, 1993, pp.639-653

Étude sur les *Comptes amoureux* (5) bis

KAJI Yoshihiro

À la suite de notre recherche sur le <style poétique> dans les *Angoysses douloureuses* de Hélisenne de Crenne, nous avons abordé la <prose poétique> dans la *Contemplation poétique* de François Habert publiée en 1542. Par l'analyse du texte au point de vue de la syntaxe, du vocabulaire, des figures de rhétorique, et de l'utilisation de <fable>, nous avons constaté que la <prose poétique> de Habert se constitue d'un style bien orné, sciemment obscurci, plein du latinisme, avec peu de souci de la musicalité phrastique, et très proche de l'<asianisme inspiré> que désigne Jean Lecoq dans *l'Idéal et la différence*.